

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 284 号

2025 年 12 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28

山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「ピリピ書・コロサイ書講解説教」より (6)

願いを起こさせ実現に至らせるのは神

「あなた方のうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」(ピリピ 2 章 13 節)

13 節を読みますと、パウロはわれわれの救いの初めも途中も終わりのも神が働いておられると見ていることが分かります。そうですから、われわれは自分の信仰について少しも自慢することができない。あなた方のうちに働きかけて、その信仰の願いを起こさせ、それを実現して信仰に至らせるのは神である。それは神のよしとされるところだからである。神のお喜びになることである。

すべてのことをつぶやかず、疑わないでしなさい

「すべてのことをつぶやかず、疑わないでしなさい。」（ピリピ 2 章  
14 節）

これは、私が言う「目の前にくる義務をなせ」と同じ意味であります。すべてのことをつぶやかず、疑わずにしなさい。目の前にくる自分のなすべきことは、つぶやかず疑わずにしなさい。つぶやかず疑わずにするということは、神に対する従順の態度であります。…

私は牧師として、こうして人には称名をすすめ、天国のキリストに迎えられることを勧めておりますけれども、自分の日々の生活はやはりつぶやきと疑いです。私の基調はつぶやきと疑いです。そうですから、われわれはいよいよ深く主の名を呼ぶ必要がある。あなた方は、つぶやきと疑いであってはいけないと言う。

## 自分のなすべきことに命をかける

第1の感想は、10年前に述べたのと同じです。繰り返します。パウロは、自分の福音宣伝の義務と申しますか、なすべきことをなすために命をかけている。汝らの信仰の増進のためなら、私は命を捨てても、血を流しても嬉しい。パウロは、生命を鴻毛よりも軽しとし、自分のなすべきことに対してはできるだけ誠心誠意やりたい。

自分のなすべきことに命をかけることができるのは、パウロは復活の望みをもっているからです。この世が終われば、無限の光栄が待っている。パウロはそういうことがはっきり分かっていますから、自分のなすべきことに命をかけることができる。パウロのなすべきことは伝道です。我々にも毎日なすべきことがある。

## パウロが命をかけた福音

第2の感想は、パウロは自分の命をかけてでも人に福音を宣べ伝えたいという願望を持っていた。そしてパウロは、本当にその願望にかなった人生を送った。そうですから私は、パウロの持っていた福音、彼が理解していた福音は、いかに尊く、いかに深く、いかに人生にとって必要なるものであるかということを感じざるを得ない。

パウロはその無限の富を、その信仰を、ロマ書において数学的正確さをもって説明した。私はこのパウロの無限の富、人類に対する貢献、その尊さ、その高さを少しでも知りたい。また1981年ら、数年にわたって第3回のロマ書の勉強を皆さんと一緒にしますが、パウロが味わったこの無限のはかるべからざる幸いなる福音、救いの内容を知りたい。これは万人に可能であるに違いない。そういう願望を持っている。

## わが主イエスよ

第3の感想。10年前にここを勉強したときには、私はまだロマ書10章1節から13節までに説かれてる称名のことを知らなかった。私はただいまは称名のことを知っている。ですから、12節の「自分のすくいを達成せしめられよ」という今日の教えに対して、私は皆さんと一緒に、救いの達成のために、「わが主イエスよ」と、日々主の名を呼びましょう、ということをつけ加えたい。

## キリスト教は謙遜の宗教

これ（謙遜）は、幾度繰り返しても味わい深い言葉です。カーライルは、「キリスト教は謙遜の宗教だ」と言ったそうではありますが、自分を低くする、自分を低く見る、これが人間のもっとも大切なことです。誰でも口では、いやあ、と言っていますけれど、自分は相当なものだと思っている。

神の子イエス・キリストが低くなって大工の職をされたごとく、イエスのその「謙遜」の意味が分かってくれば、われわれの人生において不服というようなものはなくなる。われわれは自分が良い、自分が偉いと思っているから、腹が立ってけんかになる。自分は悪くて自分は低いんだと思ったら、どんなことでも辛抱できる。

イエス・キリストは神の子であって大工を30年やられた。これだけでもどれほどの謙遜か、神秘さか分からない。イエスは、この人生が終わったら天国へ帰って復活する、主の許に帰るという大きな望みがあったから謙遜ができた。

## 神様、喜びをください

私は生活の標語に「生けらば称名このままで目の前のなすべきをなし、御名によって祈る。死ねば天国キリストに迎えられる、その時の喜びやいかん」と言っております。私の本当の祈り、希望は「死ねば天国、キリストに迎えらる、その時の喜びいかん」これは永遠の生命の実現の初めですから、これは非常な、すごい喜びに違いない。その喜びを私は喜びたい。神様、喜びをください、というのが私の最大の祈りです。

## パウロの愛の生活は、信と望から来た

滋養分を食べたからと言って、力は出てきませんよ。物さえ食べたら力が出てくるのではない。どんなにうまいものを食べても、滋養分を食べても、いくら肉体が丈夫でも、我々に「やる」という精神が欠乏していたら、そんなものは当てにならない。精神の問題ですよ。もちろん物質も必要だけれど、物質とともに「やる」「やらなければいけない」という精神がなければ、そんなものは問題にならない。ものにならない。

その精神、その力はどこから出てくるかというと、復活の希望からくる。パウロが走り続けた彼の愛の生活は、彼の「信」「望」から来た。彼の生活は彼の復活の望みの裏です。われわれも少しくこの聖書の真理を学びたい。まねしてみたい。復活の希望を頂きたい。

## テモテのような心

「テモテのような心で親身になってあなた方のことを心配している者は、他に一人もいない」（ピリピ第2章20節）

「テモテのような心」というのは、原語では「同じ心」ですから、これは「テモテのような心」とも読めますし、「パウロのような心」とどっちにも読める。そうですから、これは「パウロのような心で、親身になってあなた方のことを心配している者は、他に誰も一人もいない」と訳した方がいいでしょう。しかし、パウロは自分の名前を出したくない。そこで、パウロともテモテともどちらにでも取れるようにパウロは配慮した。

この手紙の初めに「キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから…」と書いた。これはパウロの手紙ですよ。それに「テモテと一緒に送る」と、二人で送ると書いてある。主語が二つになっている。こういうところはいかにもパウロは、自分を低くして人を高くしている。それがここにも出てきている。

## 幼子の如くなれ

「人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない」（ピリピ 2 章 21 節）

伝道者と言っても、必ずイエスのことを言っているとは限らない。我々の先生のモーク先生が、「この頃の牧師先生はキリストのことを宣べずに、自分のことを宣べている。」とおっしゃった。そうでしょう。このごろの牧師は大体、自分の勉強したこと、キリスト教について勉強したことをしゃべっている。イエス・キリストの福音ということが分からない。それを宣べている牧師は少ないでしょう。皆、自分の勉強、自分のことを宣べている。そうですから、モーク先生の現代牧師に対するこの批判は鋭いと私は思う。…

「幼子のごとくならずば天国に入れず」は、イエス・キリストのお言葉です（マルコ伝 10 章 15 節等）人間の思いのままでは天国に行けない。イエスの教えの通りにしなければ行けない。それは難しくない。神は行けるようにしてくださった。これを福音という。贖いです。

## テモテはパウロを助けた

「しかし、テモテの練達ぶりは、あなたがたの知っているとおりで  
ある。すなわち、子が父に対するようにして、私と一緒に福音を仕  
えてきたのである」(ピリピ書第2章22節)

テモテはパウロに仕えた。パウロの伝道を助けるためにテモテは  
仕えた。しかしパウロは「テモテが私に仕えた」とは言わなかつ  
た。パウロは、自分とテモテとは同じ兄弟であるということをはっ  
きり知っていましたから、この手紙を書く時にも「パウロとテモテ  
から手紙を書く」と二人にした。そしてここでも、二人ともキリス  
トに仕えたと言っていますけれど、テモテはパウロに仕えたので  
す。子が親を助けるごとく、テモテはパウロを助けた。それをパウ  
ロは、「テモテと一緒に福音に仕えてきた」と言った。

## したいことよりすべきことを先にやる

「しかし、さしあたり、私の同労者で戦友である兄弟、またあなたがたの使者として私の窮乏を補ってくれたエパフロデトを、あなたがたのもとに送り出すことが必要だと思っている。」（ピリピ書 2 章 25 節）

テモテを送るのは希望であるが、エパフロデトの方は必要です。

「すべき」です。必要なことが先にある。したいことより必要なこと、すべきことを先にする。これは大切です。誰でも自分がしたいことを先にやりたい。しかし、すべきことを先にやる。したいことが後になる。エパフロデトを送り出すことが必要だと思っているという。

エパフロデトが病気になった。エパフロデトはピリピ人を代表して、ピリピ人の贈り物を持ってパウロを助けに行っている。それが病気になったものですから、エパフロデトパウロを助けることが出来ない。むしろパウロに厄介になっている。そうですからエパフロデトは非常に心を痛めている。

## 死ねば天国キリストに迎えらる

こういう行ない一つにしても、それはパウロの復活の希望からくる。この事実は信仰を教えている。行ないは信仰の裏です。信仰無くして行ないは出てこない。一日ぐらいは出来るけれども、2日目はできませんよ。これはパウロ先生の「おのれに薄く人に厚く、おのれに低く人に高く」です。「死ねば天国キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん」。この望み、死ねば天国でキリストに迎えられたときに無限の栄光の生活が始まるということをパウロは良く知っている。ロマ書第8章18節で、「今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現わされようとする栄光に比べると、言うに足りない」とパウロは言った。それがここに出てきている。